



59号 巻頭言

遠隔会議の活用—ウイズコロナ時代の会員の交流

八幡浜総合病院 越智 元郎



2020年の新型コロナウイルス感染症蔓延は社会に大きな影響をもたらした。対面での集会や催しも徐々に開催されるようになるだろうが、その規模や開催頻度などには今後も制限が加わるだろう。

筆者は、2020年度の水難学会総会が中止と伺ってからは、学会が計画される遠隔会議等にはできるだけ参加させていただくように努めて来た。その中で改めて気付いたのは、自分がどこに住んでいるかは関係がないことである。地方に住む者の宿命として、首都圏で開催される催しに出向くには、費用も時間もかかる。後泊しにくい職場の状況下に、催しの途中で中座したり、帰りの飛行機の時間が気になったりということが少なくない。

一方、インターネットを用いた会議には自宅や職場などから、時間のロスなく参加できる。昨年8月に参加したオンライン勉強会は、諸事情のため帰省先に向かう妻が運転する車内で講義を受けさせていただいた。

筆者の職場でも会議室に座る職員の実人数を減らすために、一定の人数をSkype経由での参加に割り振っている。また、お盆休み中に開催された会議では、以前なら欠席するか休暇中に職場に出向くことになっただろうが、オンライン会議の今回は自宅から参加し、数分間の報告もこなしたが、私が職場外から参加していたと気付いた人は少なかった。

水難学会のオンラインの催しでは、司会者の方々が朗らかで、進行の手際がとてもよい。これは司会者と催しの企画者および主催者の意思の疎通がよく取れており、遠隔での参加者の多くと面識があることが土台になっている。旧知の仲間との交流については頻回の遠隔会議や電子メールを通じた連絡により、維持し深めることができるだろう。

一方で、新たに参加される会員が、旧来からの会員との間で忌憚(きたん)なく意見や情報交換をすることができるだろうか。筆者は楽観的に考えている。我田引水かも知れないが、筆者がかつて運営した救急医療メーリングリスト(略称EML、1996年発足)の経験を述べたい。EMLは様々な領域、職種の、1000人を超える会員が氏名、連絡先を明らかにした上で参加した。配信メール数は年平均6000通を超え、「オフ会」と称する実際に集う懇親会も、会員間の交流の機会となった。この

会員の横のつながりにより、多数の有意義な社会的活動が行われた。水難学会の前身の着衣泳研究会の発生母体となったことも筆者の誇りである。

2001年3月にはEMLメンバーにより、「遠隔講義：心肺蘇生法2001年の展望」²⁾という催しを企画した。これは3つの大会会場から発信する5つの講義を、この3大学を含む複数の会場で放映し、双方性の質疑をも行うものであった。この講義の一つとして、斎藤秀俊・現水難学会会長の「溺水への対応と着衣水泳の意義」が、これは秋田大学から発信された。

この遠隔講義の催しは、各地の複数の会場に聴講者が集まって実施したものであり、自宅や職場の端末からそれぞれが参加する、昨今の遠隔会議とは程遠かった。質疑応答の切り替えや資料提示の方法などにも制限があった。また、毎日でも実施できるという手軽さはなかった。水難学会に限らないが、現在の通信技術を用いれば、日常的に行われる文字情報での交流に加え、映像や音声を加えた遠隔会議や講義を定期または不定期に開催できる。これにより、会員相互の交流と会員個人のレベルアップを図ることができるだろう。また、規模は限られるかも知れないが、今後リアルに開催される学会や研修会において、初対面とは思えないような親しみを持って、交流を開始できるのではないだろうか。

また、メーリングリストでは、電子メールという文字を通じた交流が行われる。多数の会員が空間的、時間的な制約を超えて、生産的な情報交換をすることができたことは間違いない。一方で人の集まりである以上、誤解や感情的な行き違いなどを免れられないことも経験した。結局は、構成員それぞれが何を持ち寄り、そして何を得るかという、リアルな団体の活動のありよう共通の課題が存在することになる。しかし、リアルな団体がリアルな集会を行えない時にも、メーリングリストのような文字情報を通じた交流によって、相当の部分を補えるのではないだろうか。

多くの会員の皆様が、今後企画される遠隔会議や講習会などに積極的に参加して下さることを期待している。

【参考文献】

- 1) <http://plaza.umin.ac.jp/GHDNet/ayumi.htm>
- 2) <http://plaza.umin.ac.jp/GHDNet/mincs.htm>